Hokuriku University

北陸大学　紀要
第12号　(1988)
pp. 131～148

現代の歴史的定位

——ゴットルとヤスパース——

鉢　野　正　樹*

Ortsbestimmung der Gegenwart

——Gottl und Jaspers——

Masaki Hachino

Received October 29, 1988

Zusammenfassung

1. Die funktionelle Lehre der Wirtschaft ist geeignet nur für die Erklärung ihres kurz-fristigen Wechsels. Dagegen will die morphologische Lehre der Wirtschaft ihren lang-fristigen Wandel verstehen.

2. „Die Grenzen der Geschichte" von Friedrich Gottl-Ottlilienfeld beschäftigt sich mit dem Unterschiede der Seinsweise zwischen Natur und Geschichte. Er fragt danach, welches Sein die Geschichte habe und wie man ein solches Sein erkenne.

3. „Die geistige Situation der Zeit" von Karl Jaspers zeigt uns, wie der Mensch als ein situationsbedingtes Dasein durch den ernsthaften Ring um die Situation zum wahren Menschsein gelange.

一　問題提起

(一)　短期と長期

経済学に，短期あるいは長期という概念を導入したのは，アルフレッド・マーシャル（Alfred Marshall, 1842－1924）であった。マーシャルは，市場での価格変化に対応して，企業が早急に生産能力を調整できないほど短い期間を短期といい，これができるほどの期間を長期といった。しかし，短期が何年ぐらいで長期が何年ぐらいかについては，その期間を特定しなかった。このように経済理論では短期，長期といっても，その期間は漠然としたものにすぎない。しかし，経済実践では，短期は一年，中期は五年，長期は十年というようにかなり明確な区分がされている。経済統計の期間区分も，ほぼこれに準じて行われている。

---

*教養部
Faculty of General Education

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

短期を一年，長期を十年とする期間区分は，確かにわれわれが，過去，現在，未来にいたる歴史的視野をひらかんとするときには，あまりにも狭い。しかし，経済期間のこのような狭い設定にもそれなりの理由がある。

一つには，「経済は，生きものである。」とよく言われるほどに，経済には変動がはげしい。しかも変動の速度は，日増しに加速されている。経済が国家単位で孤立することは，交通と通信の発達した今日の世界ではありえない。経済が外に向かって開かれれば開かれるほど，それだけ外からの影響をうける度合も大きくなる。それは経済に活力だけでなく，変動をももたらすことになる。目まぐるしく変化する，例えば外国為替市場のような経済活動の場においては，現下の変動が問題なのであって，超短期の数値の変化が注目される。この例でみられるような世界経済のいわゆる同時化は，経済期間の短縮をもたらしている。

この結果，国際化ともよばれる時代の情況の中で，人間の視野は，確かに世界に向かって空間的には広まったが，しかし歴史に向かって時間的には狭くなった。同時に，短期を一年，長期を十年ととるように経済期間も短縮されている。

更に，経済計画の策定が経済期間の区分に影響を及ぼしている。経済計画は市場の価格に「経済過程」の運営を委ねる「市場経済」と国家の計画がこれを行う「計画経済」とでは，「経済過程」に及ぼす規制力に大きな開きがある。しかしいずれの経済体制においても経済計画は「経済過程」の運営のためにとり入れられている。しかもこの際，経済計画の及ぶ経済期間は，経済計画が積極的に導入されたソ連にならって五年とされることが多い。わが国で策定された各種の経済計画も，五年を基準としている。しかもこの五年を中期経済計画と呼ぶのが通常である。ここからも当然，短期一年，長期十年の期間区分が定まったといえる。

しかし，これらよりもっと重要な理由が他にあげられる。それは，経済学の理論構成が「数量化しうる概念」によって行われ，「数量化しえない概念」が捨象されたことに関連している。この点について若干の説明を，以下で行おう。

学問の「対象」を「目に見えるか」，「目に見えないか」によって二分し，前者を対象とするのを「自然学」[(1)]（Naturlehre），後者を対象とするのを「生活学」[(2)]（Lebenslehre）と名づけたのは，フリードリッヒ・オットリリエンフェルト＝ゴットル（Friedrich Ottlilienfeld-Gottl, 1868－1958）であった。ゴットルの業績で重要なことは，決して，常識的ではあるが啓発的な基準によって学問を二分したことではない。そうではなく「自然学」のように動物，植物，鉱物といった「肉眼」でとらえることのできる対象をもたない「生活学」も，「肉眼」とは異なる「心眼」をもって，政治，経済，社会などの対象をとらえていることを明らかにしたことであった。

しかも単に「心眼」が対象をとらえているといっただけではなく，「心眼」はとらえた対象を「概念」にまで構成していることを明らかにしたことである。われわれは生活の周辺に，「肉眼」だけでなく「心眼」が構成した「概念」を多くもっている。

ゴットルは，「心眼」が構成した「概念」をこれ以上は分析しなかった。しかし私は，同じく「心眼」でとらえるしかない対象にも，先にも述べたように，「数量化しうるもの」と「数量化しえないもの」が区別されると思う。例えば，前者の代表的な例を「景気」とすれば，後者のそれは「体制」となるだろう。「景気」も「体制」もそれ自体としては「肉眼」でとらえられるものでなく，「心眼」でとらえられ，「概念」に構成されたものである点では同じである。しか

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

し両者の間には，「景気」が例えば在庫投資の循環というように「数量化しうる概念」であるのに対して，「体制」は例えば市場経済と計画経済というように形態によって表現するしかない「数量化しえない概念」であるという違いがある。

そこで私は，経済学も「数量化しうる概念」を基に理論構成を行うものと，「数量化しえない概念」を基にこれを行うものとに二分されると思う。前者を「函数論的経済学」とすれば，後者を「形態論的経済学」と名づけることができる。このような経済学の分類は，ヨセフ・シュムペーター（Joseph Schumpeter, 1883－1950）が「経済分析の歴史」（History of Economic Analysis, 1954）の中で行なっている「純粋経済学」と「経済社会学」とにほぼ相当する。(3)

ところで経済学が，これを近代経済学と呼ぶにせよ，シュムペーターのように「純粋経済学」と呼ぶにせよ，私のように「函数論的経済学」と呼ぶにせよ，いずれもその理論構成を「数量化しうる概念」によって行い，かつ数量関係を厳密に規定することが自然科学のような精密科学に近づく道と信じていることは疑いない。確かに，経済活動は，政治活動や，社会活動に比較すれば数量の対応関係に係わる度合がはるかに大きい。例えば，金利と株価の間には対応関係がある。内外の金利差と為替の間にも，これがある。所得と消費の間にも，これがあるだろう。しかし，「函数論的経済学」が「数量化しうる概念」によってのみ理論構成をすればするほど，このような理論がその妥当性の度合を高めようとして，その該当する経済期間を短縮してゆくことも避け難い。何故なら，自然における数量関係は不変であるが，歴史における数量関係は可変だからである。例えば，空気中の酸素と窒素の割合が一対四という対応関係は安定しているが，GNP中の所得と消費の割合が三対二という対応関係は決して安定したものではない。従って，経済学の理論が妥当性を高めるには，対象とする経済期間を短縮することが必要となる。

これは同時に，「函数論的経済学」が短期の経済政策の立案には極めて有力であることをも意味している。しかし，経済政策が単に一年，五年，十年といった経済期間を超えて，未来への展望をひらかんとする時に，この種類の理論に限界が生じてくる。従って，経済政策が真に長期にわたる展望を必要とする時には，「函数論的経済学」に代わる「形態論的経済学」が有力になってくるはずである。しかし，今は「函数論的経済学」が主役の時代であって，このため経済期間も，わずか十年を長期とするように短縮されざるをえなくなっているのが経済学の実情である。

(二) 数量と構造と形態

経済的活動の中には，数量関係の決定を迫る問題が多々ある。「経済過程」(4)を，1　生産と消費，2　分配，3　投資，4　技術，5　立地，以上五つの側面から定義したのはワルター・オイケン（Walter Eucken, 1891－1950）であるが，オイケンのいう「経済過程」のどの側面をとっても数量関係を決定しなくてすむものはない。この中で技術と立地の側面のみは数量関係による表現にはなじまないようであるが，それでも技術進歩と経済成長率を関係づける試みもされているし，輸送費による生産地の配置という試みもされている。「経済過程」の運営は，企業単位でみても国家単位でみても数量関係の決定が多々あることは疑いない。

従って，このような数量関係の決定に理論的根拠を提供してくれる「函数論的経済学」は「経済過程」の運営にとって不可欠である。特に国家単位の「経済過程」の運営に，いわゆるマクロ経済学の果たした貢献は決定的であった。今日ほとんどの国家で採用されている国民所

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

得統計は，その顕著な実例である。国民所得統計は，マクロの国民所得分析の理論が基になって作成されている。この国民所得統計は，国家の総需要に占める内需と外需の関係や，個人消費や民間投資や政府支出の動向や，その他，例えば消費税を３％と設定し個人消費を二〇〇兆円とすれば，ここから六兆円の税収がえられるという概算などを容易に見せてくれる。

しかし，「函数論的経済学」が数量関係の決定に有力であるということは，その反面，この決定の効力が短期的でしかありえないという弱点を合わせもつ。確かに「函数論的経済学」そのものは，あらゆる時代のあらゆる国家の数量関係に対応すべく構成されたものである以上，その効力には短期も長期もないはずである。理論は普遍妥当性をもつべきものであるというのは，その通りである。しかし，数量関係そのものが，すでに言及したように自然における不変のものとは異なり，歴史においては可変のものである限り，経済学に解決を求める数量関係の故に，これを主にあつかう経済学も短期的なものに見られざるをえない。この結果，「函数論的経済学」が数量関係の決定に有力であればあるほど，必然的にその効力も短期的と評価されざるをえない。

もし，短期的に問題を解決することが，同時に長期的に問題を解決することになるならば，「函数論的経済学」の問題の解決が短期的であることは決してその弱点とはならないはずである。しかし，短期的な問題の解決は，必ずしも長期的な問題の解決を保証しない。例えば，ケインズの有効需要の理論は国家の有効需要が不足する時には，財政支出を増加させたり，貨幣供給量を増大させたり（あるいは，金利を低下させたり），貿易黒字を拡大すれば問題の解決になることを示してくれる。確かに，この点ではケインズの理論は有力である。しかし，この理論による解決の効力が短期的であることも否定しえない。何故ならば，このように短期的には成功したかに見えた問題の解決も，長期的には財政赤字，物価騰貴，他国の貿易赤字という別の問題を生ずれば何ら解決にはならないからである。

それでは，「函数論的経済学」が理論そのものの性格からではないにせよ，現実から出される数量関係の規定を厳密にして行く過程において，結果的には経済問題の解決を短期的にし，このため長期的視野を失う傾向に陥っているというのはどうしてなのか。

それは先にもあげたオイケンの経済学体系に基づいて説明すれば，「函数論的経済学」が，自己の研究対象を「経済過程」にのみ限定したために，オイケンの経済学体系にある他の二つの領域，「経済秩序」[(5)]と「与件連環」[(6)]をその視野の中にとり入れることができなくなっているからである。「経済秩序」を構成する市場経済や計画経済は歴史的に変化はするが，このような形態変化は「経済過程」の生産，消費，投資，分配，技術，立地などの数量変化に比べれば変化の速度ははるかに緩慢である。従って，経済の形態変化を視野に入れるには歴史の長期的展望が必要となる。

同じことは，「与件連環」についてもあてはまる。「与件連環」を構成する欲求，自然，労働，資本，技術，制度も変化するがこのような構造変化は，「経済過程」にある経済諸量の数量変化に比べれば緩慢であり，「経済秩序」の形態変化と同じようにこれを視野の中に入れるには歴史の長期的展望が必要である。

経済実践の場においてはすでに「函数論的経済学」の問題解決が短期的であることは意識されており，この欠陥を克服するために，数量変化からは捨象された構造変化を対象とする「構造論的経済学」による補完が行われている。この間の消息は，わが国の各種の経済計画が単に

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

経済計画と命名されず，経済社会計画とされていることによっても知られる。経済の構造変化は，産業構造の変化のことであるが，それが農業から工業への移行（あるいは，産業革命）であれ，大企業と中小企業との間にある企業間格差（経済の二重構造）のことであれ，都市と農村との間の地域間格差のことであれ，重厚長大型産業から軽薄短小型産業への移行のことであれ，ソフト化・サービス化・情報化といわれる第三次産業の発達のことであれ，これらの構造変化は，欲求なり，技術なり，労働（人口）なりの何らかの「与件連環」の変化に基づいて起こっている。「函数論的経済学」は，「経済過程」に対象を限定したため，このような「与件連環」の変動を捨象した。これに対して，「構造論的経済学」は「函数論的経済学」が捨象した対象を自らの対象として，経済問題の中期的解決に理論的根拠を提供しようとしている。

「構造論的経済学」が数量関係を超えて構造変化にまで対象範囲を拡大することによって経済学の時間的制約を短期から中期へと延長させたことは，経済問題のより長期的解決を可能にした。しかし，依然として構造変化を数量関係で規定する限り，「構造論的経済学」も「函数論的経済学」と同じような時間的制約はまぬがれない。構造変化というのは欲求与件の変化からくる消費構造にしろ，技術与件の変化からくる産業構造にしろ，生産，消費，分配などの経済諸量ほどでないにせよ，その変化は数量関係でとらえられる。このため，構造変化の「数量化しうる現実」の陰にかくれているはずの「数量化しえない現実」の動向が見えにくくなっている。

それでは，数量変化でなく，構造変化でなく，形態変化を対象にする「形態論的経済学」は，先の二つの経済学の短期，中期の時間的制約を克服して，経済問題の長期的解決を可能にするだろうか。この問いへの肯定的答えが出されるためには，形態変化も構造変化ほどではないにせよ，例えば「市場経済」での独占化の度合が企業の市場占拠率でとらえられたり，「計画経済」による管理化の度合が公定価格と自由価格の比率によってとらえられたり，いずれも数量関係でとらえられるという事実をふまえた上で，「形態論的経済学」の本来の対象がこのような「数量化しうる現実」にではなく，「数量化しえない現実」にあることを前提にすることが重要である。

この前提に立ち，「形態論的経済学」が対象とする形態変化が，その生成から発展そして崩壊に至るまでには相当に長い歴史期間を必要とすることや，形態変化が政治，経済，社会の間に「民主政治」，「市場経済」，「契約社会」の系列と，「専制政治」，「計画経済」，「血縁社会」の系列に関連するものであること[(7)]や，「経済過程」と「経済秩序」との間には後者が前者の必須の枠組みとなることなどの認識がもたれるならば，ここから経済問題の長期的解決の可能性が生じてくる。

かくして，「形態論的経済学」による経済問題の解決は，まず形態が長期にわたる生成過程を経るという意味で長期的であり，更に政治，経済，社会三者の関連を視野に入れるという意味で数量関係の解決とはまた別の意味で現実的であり，終わりに「経済過程」にとっての枠組みを「経済秩序」によってつくり出すという意味で形成的となるはずである。

しかし，「形態論的経済学」のような歴史と固く結びついた経済の理論が成り立つためには，経済と歴史を一貫する存在論的基盤が説明されなければならない。以下で，この問題を論ずることにする。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

二　歴史への問い

(一)　歴史と形態

私は「函数論的経済学」が短期的とならざるをえず，「構造論的経済学」も中期的とならざるをえず，「形態論的経済学」のみ長期的となりうると論じてきた。「形態論的経済学」が長期的となりうるのは，これが対象とする「経済秩序」と，「経済秩序」から構成される「経済形態」が一朝一夕によって成るものでなく長年月の歴史を経てはじめて形成されるからである。「函数論的経済学」の対象とする「経済過程」も，「構造論的経済学」の対象とする「与件連環」も，確かにとらえようによっては歴史を経て形成されてきたものと認識されそうであるが，すでに見たように，これらが数量関係としてのみとらえられている限り，歴史を織りなす諸要素で数量関係として把握されないものについては大幅に脱色される。幸い，数量関係ではあまりに表面的にしか規定しえない「経済形態」のみは，歴史を織り成す諸要素との絡みの中でとらえられる。この結果，経済と歴史とは「形態論的経済学」において最も深く重なり合う。これに対して，経済と歴史とがあまり深く接し合わない数量変動と構造変動とをそれぞれ対象とする「函数論的経済学」と「構造論的経済学」では，歴史が問題にされることが当然のことながらあまりない。従って，歴史が問題にされるのは，あくまでも歴史と深く係わり合う形態変動を問題にする「形態論的経済学」となる。

「形態論的経済学」において経済と歴史とが重なり合うのは，すでに見たように「経済形態」が形成されるのに歴史を要するからである。しかし，歴史についてこれだけのことしかいわなければ，歴史とは単なる時間の延長にすぎなくなる。これでは歴史について，何ほどのことも明らかにしたことにならない。歴史を問題にするということは，何よりも歴史とはいかなる存在であるかを明らかにすることでなくてはならない。歴史の存在を明らかにするというのは，歴史が古今，そして東西にわたって何であったかを明らかにすることである。それは結局，歴史の不変かつ普遍の姿を明らかにすることである。

果して，このことは可能であろうか。この種の問題に最も深く切り込んで，歴史とはいかなる存在であるかを問い，かかる存在はいかに認識されるべきかを問うことによって，歴史と同時に社会の有機的組成を明らかにし，合わせて歴史と社会の接点にある経済の存在にも重要な光を当てたのはゴットルであった。私は以下で，ゴットルの論文「歴史の限界」(Die Grenzen der Geschichte,1903) によって，歴史という存在の有機的組成について，ゴットルの所論を解説してみたい。

(二)　自然と歴史

歴史とはいかなる存在であるかを問題にすることは，歴史学という学問の対象がいかなるものかを問題にするのと同じことである。歴史学の対象は単に遺跡や，伝承や，文献などの過去の記録（記憶）にとどまるものではない。何故なら，すべて過去の記録は必ず「何か」の記録であるから，記録の対象となった現実の方がより根本的である。すべて現実というものは，世界に出現し，かつ人間の感覚に経験されることによってはじめて現実として認知される。この意味で未来は，世界に出現もせず従って認知もされていないが，かといっていずれは必ず出現もし認知もされるので現実以前の現実，未現実の現実といえる。しかし，いかに確実に出現し，かつ認知されるはずの現実であっても，世界に出現するまでは現実とはいえない。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

過去は完全に出現しつくし，かつ完全に認知されつくされた――たとい人間に認知されないことがあったとしても――現実である。このような現実をゴットルはGeschehenと名づけている。Geschehenは辞書そのまま翻訳すれば，出来事とか事件となるが，ゴットルの用法では自然現象の意味と生活事象の意味を合わせもっている。私は，この語を日本語にもないが私訳として，「現事」としておく。

ゴットルは「現事」(Geschehen) には，二種類のものが区別されるという。われわれが現在から過去へとさかのぼる時，われわれは世界に出現しかつ認知され，人間によって記録された「現事」に次から次へと出会って行く。もちろん，世界に出現した「現事」の中には，誰からも認知されず，従って人間によって記録されることなく歴史の中に没し去って行った多くの「現事」があるにちがいない。確かに「現事」の中には人間によって記録されなくても，今日の発掘が明らかにするような自然の中に直接記録されたような「現事」もある。しかし，過去のある時点にまでさかのぼると，われわれは一つの種類の「現事」にはもはや出会わず，別の種類の「現事」にしか出会わなくなる。この一つの「現事」から他の一つの「現事」への転換期が，「歴史」(Geschichte) と名づけられる種類の「現事」(Geschehen) の限界であるとゴットルはいうのである。ゴットルの言葉で説明すれば，以下のようになる。

「歴史の限界とは，歴史的現事が現実に起こった出発点に他ならない。次の種類の熟慮が重要である。歴史的現事をこのようにとらえて過去にさかのぼって追跡して行く時，それが何処でついに途切れるのであるかということ。歴史的現事は，どのようにしてもう一つの現事の中に自らの姿をかき消すのであるかということ。また，このもう一つの現事とは何かということ。大まかにいうと，これらがわれわれの問題のすべてである。」[8]

われわれが歴史を現在から過去に向かってさかのぼる時，すでに見たように「歴史的現事」(das historische Geschehen) に出会って行く。しかし，ある時点を超えると，そこには「歴史的現事」はなくなり，ゴットルの用語ではないが，「自然的現事」(das natürliche Geschehen) のみの過去に出会うことになる。ゴットルは，「歴史的現事」の期間のみを「歴史」(Geschichte) と呼び，それ以前の「自然的現事」の期間を「歴史」に含めることを拒もうとする。しかし，歴史という概念は一般的にもっと広く人間の歴史，自然の歴史，更に，宇宙の歴史をも含むことが多い。この歴史の一般的概念を考慮してゴットルは，「歴史的現事」のはじまりを歴史の起源といわず，歴史の限界と名づけている。

歴史をゴットルのように一義的には「歴史的現事」に限定し，「自然的現事」を歴史から排除することには問題もあるだろう。しかし，ゴットルの業績の重要な点は，歴史の限界について提起したこのような見解にあるというよりは，むしろ，このような限界の設定を通して，世界に出現する「現事」について，「歴史的現事」と「自然的現事」を区別したことであった。これによって，同じく存在するといっても，歴史の存在と自然の存在とでは存在論の上から重大な相違のあることを示したことである。

それでは，歴史と自然との間にはいかなる存在論上の相違があるか。まず，自然という存在についていえば，自然とは一回限りのものとしてしか世界に出現しない。エルンスト・マッハ (Ernst Mach, 1838－1916) の言葉によれば，「自然は，ただ一回限り出現する。」[9] (Die Natur ist nur einmal da.) このような自然の定義は，確かに動物や植物の種の保存，あるいは生物進化の理論とは矛盾するように思える。何故なら，動物にせよ，植物にせよその種は人類

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

と同じく決して一代だけで絶滅するものでなく，一つの種は一つの世代から他の世代へと連続しているからである。こう見れば，生物は決して一回限りで終わり，また別の種が出現するというものではない。進化論は，一つの種から他の種への非連続の連続をも仮定している。しかし，重要なことは動物や植物が世界に出現する時に，決してその度ごとに世界に何か新しいものをもたらすという事実が認められないことである。いかに次から次へと新しい個体が連続して世界に出現したとしても，各個体は一回限りのものとして世界に出現したのであって，ある個体が生物学的資質の他に，他の個体のために何かを生産するという形で世界に新しいものをもたらすことはない。自然は世界に出現する度ごとに，ただ一回限りのものとして生成し消滅して行く。

進化論に関しても，これが仮設以上のものだとしても，進化論は生物が新しくされるというだけで，生物が何か新しいものを世界にもたらすというのではない。従って，仮に進化によって新しい生物の種が世界に出現したとしても，その生物もまた，ただ一回限りのものとして世界に出現するだけである。

これに比べて歴史という存在は，決して一回限りで終わるものではない。何故なら，歴史は，人間の行動によって世界に出現するが，このようにして出現した「歴史的現事」は決してこれだけで終わることがない。一つの「歴史的現事」は，他の「歴史的現事」へと有機的につながって行く。この結果，世界には常に何か新しいものが歴史となってもたらされる。これが歴史という存在である。

ゴットルはこのように，自然を一回限りの存在であり，歴史を一回だけでは終わらず連続する存在であるとした上で，それぞれの存在にふさわしい認識についての検討を行う。

㈢ 「挿入」(Interpolation) と「解釈」(Interpretation)

ゴットルは，存在の態様に対応して，認識の方法が決定されるという立場をとる。従って，歴史のような人間の行動によって出現し，しかもその「現事」(Geschehen) が次々と有機的に関連しつつ歴史的に展開して行く存在と，自然のように人間の行動とは別の理由によって出現し，従ってその「現事」(Geschehen) も一回限りの出没である存在とでは，その認識の方法は当然異なるべきだとの立場をとる。

ゴットルのこのような方法論の立場は，カントの方法論のように存在に対しては理性の彼岸にあるものとして，いわゆる「物自体」(Dinge an sich) には不可知論的立場をとって，存在よりも認識に重きをおき，存在をとらえる認識の方法のみを問題にした立場とは自ら異なる。私は，ゴットルのように存在の態様に合わせて認識の方法を問題にする方法論を「存在論」(Ontologie)，カントのように存在の態様は不問にふし，存在は人間の理性の規範に従うものとして，もっぱら認識の方法のみを問題にする方法論を「認識論」(Epistemologie) と呼ぶのが適当であると思っている。[10]

ゴットルは以上の方法論に基づいて，自然と歴史という存在の二つの態様に対応して，認識の二つの方法を区別する。まず，自然のような存在には，対象を外側から認識する方法があるという。この方法では，自然のある「現事」は，他の「現事」をここに当てはめることによって，ゴットルの用語では「挿入」(Interpolation) することによって「秩序づけられる」(ordnen)。あるいは「説明される」(erklären)。この際，「挿入」や，「秩序」や，「説明」の基盤となるのが，人間の理性が構成する「自然法則」[11] (Naturgesetze) となる。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

次に，これに対して歴史のような存在には，対象を内側から認識する方法がある。この方法では，歴史のある「現事」は，他の「現事」をここに当てはめるまでもなく，その「現事」はそのものによって自ら了解される。ゴットルの用語によれば，歴史の「現事」は，それぞれのものとして「解釈」(Interpretation) される。「解明され」(erschließen)，あるいは「理解される」(verstehen)。この際，「解釈」，「解明」，「理解」の基盤になるのは，他者の行動を自知する「思惟法則」[12] (Denkgesetze) である。

以上のことをゴットルの言葉で説明すると，次のようになる。

「ここで一つの結論を出しておこう。それは，歴史学的認識の意味と地質学的認識の意味を区別することが課題であったが，この対立を極く手短に定式化すると次のようになるということであった。

歴史学では現事 (Geschehen) の解明を行うために，存在 (Sein) の解釈 (Interpretation) を行うのだということ。

地質学では存在 (Sein) を秩序づけるために，現事 (Geschehen) の挿入 (Interpolation) を行うのだということ。」[13]

ゴットルは，山岳地帯に見られる自然の風化によって生じた岩石の海と，ローマ時代に切り出され，その後放置された石柱の跡とを比較して，岩石の海という「自然的現事」と，石柱の跡という「歴史的現事」とがいかに異なった認識の方法によって扱われるかを説明している。岩石の海という「自然的現事」，あるいは別のゴットルの用語による「自然現象」[14] (Erscheinung) は，この形状を説明するためには，何か他の「現事」，例えば「雨水は岩石を侵食する。」という「現事」がここに「挿入」(Interpolation) されることによってその形状の説明がされる。この例で見られるように，自然という存在は，ある「現事」が他の「現事」の挿入をうけることによってはじめて説明される。

これに対して石柱の跡という「歴史的現事」，あるいは同じくゴットルの用語による「生活事象」[15] (Erlebung) に関しては，同じくこの形状を問題にする時に，先の岩石の海のように，「雨水は岩石を侵食する。」という他の何かの「現事」を挿入する必要はない。確かに，石柱の跡についても，例えば，「人間が研磨すれば石柱は滑らかになる。」という他の何かの「現事」を挿入することによって因果論的に，この形状を説明することは可能である。しかし，石柱の跡の認識には，他の「現事」を挿入し，因果論的に説明するという外面的な方法ではなく，例えば，「建物を建てるためには石柱を必要とする。」といった目的論的な理解が可能であることが忘れられてはならない。石柱の跡に関しては，建物の建設のために岩石が切り出され，その結果が石柱の跡という形状を生じたということは，「現事」それ自体から自ずと「解釈」(Interpretation) されることである。自然の風化によって生じた岩石の海という形状は，「挿入」(Interpolation) によって，外面的に，因果論的に，自然法則的に説明するしかない。これに対して，人間が岩石を切断することによって生じた石柱の跡という形状は，「解釈」(Inerpretation) によって，内面的に，目的論的に，思惟法則的に理解できる。人間が石造の建物の建設には石柱を用いることを知ってさえいれば，石柱の跡を見ることによって，かつてそこでは旺盛な石造建築の需要にこたえるための石柱の製造が活発であったことは何の仮設なしで自ずから理解できる。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

㈣ 歴史と社会の有機的組成

自然という存在は，人間の行動とは別の理由によって世界に出現する。しかも世界に出現する時には，マッハのいうように一回限りのものとして出現する。一度出現するとたちまち消滅するかげろうのような自然もあれば，一度出現するや歴史の悠久な流れを生き延びてなお存続する岩石のような自然もある。その存続期間に長短はあっても，自然という存在は，一回限りのものとして世界に出現し，自然が自然を生むというように自然自らが関連し合い，連続し合って発展することはない。この意味で，自然における「現事」は単発的であって，ある「現事」と他の「現事」とが互いに空間的に時間的に，あるいは社会的に歴史的に関連し合うことはない。

自然における「現事」が，空間的，時間的に関連し合っているように見えるのは，これは，ゴットルのいうように，人間の認識が，「現事」を，「挿入」によって秩序づけるからにすぎない。例えば，太陽が海洋を熱すること，海洋は熱せられると蒸気となって上空に昇ること，上空で冷却されて雨滴となって地上に降り注ぐこと，これらの「現事」の間には関連があるように見えることは確かである。しかし，このような関連は，決して自然における「現事」が自ら形成したものではない。このような関連は，人間の認識が，例えば太陽はものを熱するという一つの「現事」をここに挿入し，あるいは，水は熱せられると蒸発するという別の「現事」をここに挿入し，あるいは，冷却した空気は雨滴となるという他の「現事」を挿入し，「事象」を秩序づけた結果つくられたものであるにしかすぎない。自然という存在に則していえば，自然ははじめから地上から空中へ，空中から地上へと水の循環がなされるものとして出現していたというのが正しいだろう。

しかし，歴史という存在は，人間の行動によって出現する。人間の行動はいかなるものであっても，一回限りで終わらない。人間の行動は決して単発的に終わることなく，常に連鎖的な反応をひきおこす。このため歴史における「現事」は，他の「現事」を空間的に時間的に，あるいは，社会的に歴史的に誘発して行く。従って，歴史という存在は，有機的な連続性や関連性をもっている。

例えば，電気が発明されれば，この「現事」は一回限りのものに終わらない。電気の発明は，電燈の製作を誘発し，電燈会社の設立へと波及して行く。このように歴史という存在は，「現事」から「現事」へと有機的に発展して行く。

歴史における「現事」の背後には，人間の行動と，これを動かす意欲とが横たわっている。電気の発明の背後には，電気の謎を解明したいという人間の意欲と，このための研究という人間の行動が横たわっている。電燈製作の背後には，電気の光を闇を照らすための電燈に利用したいという人間の意欲と，電燈の発明という人間の行動が横たわる。電燈会社の設立にも，電燈を公共の利益に供したい，あるいはこれで一儲けしたいという人間の意欲と，このための資本の調達という人間の行動とが背後に横たわる。

このように歴史における「現事」は，元来人間の意欲と行動とによって世界に出現する現実である限り，同じ人間にとって，この解釈も，解明も，理解も極めて容易なことである。従って，歴史学の認識は，歴史という存在が，社会的かつ歴史的に有機的に発展して行く過程を，解釈し，解明し，理解すればよいことになる。私はゴットルの業績は，人間の行動から出発する「現事」にあるこのような歴史という存在の有機的組成を明らかにしたことであったと思う。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

ゴットルは，歴史における「現事」を次のように言っている。

「一つの現事は，理性的行為の織物として解明されるものであるが，これはあくまでも，一つの現事と他の現事との結合による創造物である。[16]

ディルタイは，自然科学の対象に対して，社会科学の対象を「社会的歴史的現実」[17]と名づけた。私は，ディルタイのこのような表現がゴットルによって，社会的，歴史的現実の有機的組成として一層深められたと思う。「社会的歴史的現実」が，ゴットルによって人間の行動によって世界に出現した「現事」が，社会的にも歴史的にも結び合った織物として有機的組成をもつことが明らかにされたからである。

三　現代への問い

(一)　三つの情況と人間存在

歴史という存在をゴットルは，すでに見たように，過去，現在，未来にわたる無数の「現事」(Geschehen) から織られた「生活事象の一枚の，巨大な織物」[18] (das eine und große Gewebe der Erlebnisse) であると表現した。この全体像を一望の下にそっくり視野におさめることは，人間の理性を超えたことである。しかし，いかに広大な風景も，遠く離れた位置からはその全体像の眺望が可能なように，歴史という存在に関してもこのような全体像の眺望ができるはずである。確かに，遠く離れた位置からは，全体に占める部分の多くが視野の中から消えて行く。曖昧な全体像より，正確な部分像の方が，精密科学の観点から高く評価されているのも事実である。しかし，すでに論じてきたように，歴史という存在が自然という存在のように一回限りの「現事」の出現に終わらず，「現事」が「現事」を生む連鎖性や連続性をもつ限り，歴史の正しい認識には部分の正確な観察だけでなく，全体の広大な眺望が必要である。

この意味で歴史の認識には，「歴史はいずこから起こり，いずこへおもむくのか」[19]というヤスパースの問題意識が必要である。ヤスパースは，次のように言う。

「現代が最も決定的な重要性をもつゆえんは，それが全人間生活に広汎深刻な変化を引き起こしている事実によるのである。現在の出来事の意義を測り知る尺度は，人類史全体以外に他に求めることはできない。

しかし人類史を回顧するとわれわれは，われわれ人間存在の秘密へと導かれてしまう。そもそもわれわれが歴史なるものを所有し，歴史のおかげでわれわれが今日あるがごときわれわれであるという事実，――この歴史なるものが，これまでに比較的にいってごく短い時間続いているにすぎない事実，これを思えばわれわれは，次の問いを発せざるをえないのである。即ち，歴史はいずこから起こり，いずこへおもむくのか？歴史とは何を意味しているのか？」[20]

歴史の認識にとって極めて重要なことは，歴史という存在が「巨大な織物」のようであり，この存在を細大もらさず完全に把握することは人間の理性を超えたことを認めつつも，従ってこの存在は「全体像の眺望」しかえられず，この限りで充分な具象性は断念し，多少の抽象性は避けられないことを認めつつも，カントの認識論のように，存在そのものを視野の外に置いて，認識のみに目を向けることをしないことである。ゴットルの存在論は，歴史という「巨大な織物」の直観，「全体像の眺望」が困難至極に見えようとも，歴史という存在は，あくまで人間の行動によって織りなされた「現事」である以上，同じ人間の理性にとって理解可能な対象

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

であるとの前提に立って，歴史という存在を常に視野の中に置き，これを対象化したり，仮設的に説明したり，視点を置いて認識しようとしたりせず，存在を可能な限りそのありのままの姿において認識しようとする。

ゴットルが「歴史の限界」の中で明らかにしたのは，歴史という存在が自然という存在とは根本的に異なり，人間の行動によって出現した「現事」であることと，この存在に適した認識の方法は，「解釈」，「解明」，「理解」であることまでであった。これ以上，その「巨大な織物」そのものについて言及することはしなかった。ゴットルの経済学体系の用語でいえば，この問題についてゴットルの行なったのは基礎論だけであって，いわば「巨大な織物」の色模様に相当する形態論にまでは進まなかった。以下，私はゴットルのやり残した歴史の形態上の変遷を，カール・ヤスパース（Karl Jaspers, 1883－1969）の「時代の歴史的情況」（Die geistige Situation der Zeit, 1930）を基にして検討してみたい。

ヤスパースのいう「情況」（Situation）とは，ゴットルのいう「巨大な織物」に相当する。ただし，ゴットルが問題にしたのは，あくまでも歴史という存在であったので，その「巨大な織物」は社会科学的な次元のもので，表層的なものにすぎなかった。これに比べると，ヤスパースが問題にしたのは更に深く人間という存在であったため，ヤスパースのいう「情況」は哲学的な次元をもち，「巨大な織物」に比べより深層的なものになっている。

しかし，両者の間にはこのような相違はあるものの，ゴットルは歴史という存在を「巨大な織物」という全体の脈絡の中に位置づけたのであり，ヤスパースも人間という存在を「情況」という全体の中に位置づけているのであるから，このように存在（「巨大な織物」，「情況」）そのものの中に，その時々の歴史や人間を位置づけている点で，同じ存在論的立場に立っている。更にゴットルが歴史を存在論的 ontologisch に不変，普遍な存在としての「歴史」（Geschichte）と，存在的 ontisch にその時々に出現する「現事」（Geschehen）とを区別しているように，ヤスパースも人間を存在論的な「人間存在」（Menschsein）と，存在的な「現実存在」（Dasein）に区別していることも両者に共通している。

ヤスパースにおいては，「人間存在」は「情況」の中で「現実存在」となる。更にヤスパースは「人間存在」に「現実存在」としての具体性を帯びさせる「情況」を三つの層に区分する。

まず，人間が何を得るかは，人間の経済的，社会的，政治的情況にかかっているから，ここに社会的情況というべきものが生ずる。次に，人間が何を知るかは，人間の知識的情況にかかっているから，ここに知識的情況というべきものが生ずる。更に，人間が何を信ずるかは，人間の自己と他者との関係や，自己と絶対者との関係からなる道徳的，宗教的情況にかかっているから，ここに宗教的情況というべきものが生ずる。以上三つの「情況」のうち，第一の経済的，社会的，政治的情況は要するに何が得られるかが問題なのであるから，これを物質的情況と見ることができるであろう。更に，第二，第三の知識的情況と，道徳的，宗教的情況は何を知るか，何を信ずるかが問題なので，これは精神的情況と見ることができるであろう。こう見ると，ヤスパースの「時代の精神的情況」が，以上三つの情況のどこに重点を置いた研究であるかが明らかである。

ヤスパースは人間の「現実存在」を規定する以上三つの「情況」を明らかにした上で，「科学及び技術時代」と名づけられる近代，並びに現代の「情況」に，どのような問題が生じているかを次のように指摘する。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

一　社会的情況に生じている問題。技術の発達は，社会階層の間の流動性を，工場労働者，事務労働者，農民，手工業者，企業家，官僚の間で盛んにした。しかしこのため，かえって帰属性を失ったすべての人間を組織の中へと拘束することになっている。(21)

二　知識的情況に生じている問題。技術の発達によって知識の公開性は広まった。印刷，通信，報道が知識の普及には役だった。しかしこのためかえって，深い知識への欲求が弱まった。(22)

三　宗教的情況に生じている問題。技術の発達によって道徳的集団，あるいは宗教的集団への依存性は少なくなった。家庭や教会は人間個人の避難所ではもはやなくなった。これらに代わって，企業や病院が人間個人の避難所となっている。しかしこのためかえって，人間個人は，出会いの機会をえるのに格別の困難に直面している。(23)

われわれは，人間本来の人間になろうとすれば，その時々に直面している「情況」を知ることが必要である。何故なら，「現実存在」として，今，ここに生きるわれわれは，直面している「情況」を通してはじめて本来の「人間存在」を自己のうちに発見するからである。ヤスパースは，この点を次のように言っている。

「情況を熟視することから，情況への支配がはじまる。情況を直視することがすでに，存在たらんとする意志のあらわれである。私が時代の精神的情況を探求する時，これによって私は，一個の人間たらんと欲しているのである。私がこの人間存在（Menschsein）からなお距離をおいて立っている限り，私は人間存在の未来と実現をただ頭の中で考えているに過ぎない。しかし私が人間存在に自ずからなるや否や，私は，私の現実存在（Dasein）をとりまく具体的に把握された情況を明らかにしながら，人間存在の実現を熟慮しつつ追求することになる。」(24)

このようにヤスパースは，人間は「情況」を通して人間となり，かかる人間のみが「情況」を形成するという。われわれが単なる「現実存在」として「情況」と厳しく対面せず，「情況」に迎合して，存在的 ontisch にのみ生きる限り，われわれはついに「人間存在」のなんたるかを知ることはない。われわれは，かくして存在論的 ontologisch に生きることなく一生を終わる。われわれが自己をとりまく「情況」を問題にする時に，われわれはすでに存在的に生きることから訣別し，存在論的に生きることを決意している。ゴットルのように歴史を問題にしている間は，われわれがいかに生きるべきかの答えは出てこない。しかし，ヤスパースのように人間を問題にすれば，人間はいかに生きるべきかへの答えが出される。

次に，ヤスパースがわれわれに最も関心の深い，現代という時代の「情況」をどのように理解しているかを検討しよう。現代の「情況」を，物質的情況からだけでなく，精神的情況からも明らかにすれば，われわれが最近よく問題にしている物質文明から精神文化へとか，ものの時代からこころの時代へとか，ハードからソフトへとか，経済から文化へとかなどの問題にも多少の光が当てられることになる。

(二)　大衆化と国際化

歴史がゴットルのいう「巨大な織物」になぞらえられるとすると，時代区分というのは，この「巨大な織物」の上に認められた著しい色模様の変化になぞらえられる。ゴットルはすでに述べたように，「巨大な織物」という歴史の存在を明らかにする歴史基礎論は行なったが，「色模様の変化」という時代区分を示す歴史形態論までは行わなかった。しかし，歴史の時代区分については実に多くのものがすでに出されている。歴史を古代，中世，近代に区分する三分法

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

は，その代表例である。

ヤスパースは歴史の時代区分を，「先史時代」，「古代高度文化」，「枢軸時代」，「科学及び技術時代」の四つによって行なった。ヤスパースは，各時代を次のように説明している。

「狭義の歴史は，大略次のような図式で描き出される。

数十万年の長い先史時代と，われわれと同様な人間が生活した数万年にわたる暗い世界から，紀元前数千年以降，古代高度文化がメソポタミア，エジプトにおいてインダス河流域において，黄河のほとりにおいて発生した。

地球全体と比較すると，以上の地域は，その他いっさいのおびただしい人間，すなわち，現代間近まで依然として広大な地域を占めていた自然民族の中に浮かんだ光の島だ，ということになる。

古代高度文化から，すなわち古代高度文化自体もしくはその周辺から，紀元前八〇〇年から二〇〇年に至る枢軸時代において，人類の精神的基礎づけが発生した。しかも相互に独立した三つの場所，すなわち東西に分極し西洋，インド並びにシナにおいて発生した。

西洋は中世末期以降ヨーロッパにおいて，近代科学を生み出し，この科学をもって一八世紀来技術の時代を生み出した——これは枢軸時代以来初めての，精神的物質的な意味で，真に全く新たな出来事なのである。

ヨーロッパからアメリカが植民され，精神的に基礎づけられた。東方キリスト教に根ざすロシアは，合理的なもの，技術的なものとして決定的に形成され，その傍ら自分の手で，太平洋岸に至るまでの全北アジアを植民した。」[25]

ヤスパースの時代区分によれば，われわれの時代である現代は，1500年代に開始した科学と，1700年代に開始した技術に規定された「科学及び技術時代」に位置づけられる。「枢軸時代」が中国とインドとヨーロッパとに発祥の地が分散されていたのに比べると「科学及び技術時代」はヨーロッパに発祥の地が限定され，ここから世界の各地へと拡散しつつある。日本もこの近代ヨーロッパ文明に1500年代中頃の鉄砲の伝来と，1800年代中頃の黒船の来航によって接触することになった。以後日本は，ヨーロッパを原点とする「科学及び技術時代」に，二，三百年のおくれをもって接続することになった。

日本はヤスパースのいう「枢軸時代」の間は，中国の影響下に置かれていた。それが，「科学及び技術時代」になってヨーロッパの影響下にあることになった。「枢軸時代」に日本に培われた精神基盤は明らかに中国的なものであり，ヨーロッパ的なものとは異質であった。日本がヨーロッパ起源の「科学及び技術時代」に接続する際，日本とヨーロッパとの間に厳存する「枢軸時代」の精神基盤の相違にどう対処するかが日本にとって，古いようであって今も新しい問題である。この問題の対処には，過去は過去，現在は現在として，「枢軸時代」の遺産は中国的なものも，ヨーロッパ的なものもすべて無視してひたすらに「科学及び技術時代」への接続を心懸けるか，それとも，日本には「枢軸時代」の中国的遺産だけで充分であって，この遺産を守りつつ「科学及び技術時代」への接続を計るか，あるいは「枢軸時代」の中国的遺産はすべて清算して，「枢軸時代」のヨーロッパ的遺産に入れかえて「科学及び技術時代」に接続するかのいずれかの方法がある。私は日本のとるべき対処の方法としては，「枢軸時代」の中国的遺産にヨーロッパ的遺産を重ねつつ，「科学及び技術時代」に接続するのが最善であると思っている。この立場からすると，「枢軸時代」のすべてを中国的なものであれ，ヨーロッパ的なも

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

のであれ切り捨てて「科学及び技術時代」のみを是とする態度に批判的となるばかりでなく，「枢軸時代」の遺産は中国のみで充分で，ヨーロッパは必要でないとの態度にも批判的とならざるをえない。

ヤスパースは，「科学及び技術時代」に先行した「枢軸時代」に蓄積されたヨーロッパの遺産を，三つに分けて次のように説明している。

一　ギリシャの学問に基礎を置く，とどまることのない合理性（Rationalität）は，生活を計算高くし，技術操作へと駆りたてた。普遍妥当性をもつ学問的研究，法的決定の予見を可能にする体系的にローマ人によって作られた法律，経済的企画における計算，合理化すれば意味を失う行為をふくめての合理化，これらすべてのことは，論理的思惟の規律と，いつでも誰にでもわかるような経験的事実への規律にどこまでも自己を開放せんとする態度の結果であった。[26]

二　自己存在（Selbstsein）における主体性は，ユダヤの予言者達において，ギリシャの哲学者達において，ローマの政治家達において，自己を自己の上に立たしめた。われわれが人格（Persönlichkeit）と名づけるものは，人間のヨーロッパにおける展開においては，以上の人々の間から生まれてきたし，その属性として合理性をともなっていた。[27]

三　東洋人にとっては現世は価値のないものとされ，この影響によって虚無（Nichts）こそ本来の存在であるとしてその可能性をいうのに反して，西洋人にとっては，現世は時間とともにある具体的な現実なのであって，これは超脱されるべきものではない。現世の外でなく，この中においてのみ，西洋人は自己を確認するのである。自己存在（Selbstsein）と合理性（Rationalität）とは，西洋人にとって二つの源泉である。これによって西洋人は，現実を誤りなく認識し，支配しようとするのである。[28]

以上ヤスパースによれば「枢軸時代」から継承したヨーロッパの遺産は，合理主義，主体主義，現実主義の三つとなる。この遺産の上に「科学及び技術時代」がヨーロッパの地に開花したことになる。

ヤスパースのいう「科学及び技術時代」が開始して五百年の年月が経過した。この長年月にわたる「巨大な織物」を遠望すると，この中に二つの著しい色模様が浮かんでくる。それは，大衆化と国際化の二つである。いずれも技術進歩が引き起こした「現事」であった。

何故なら，技術進歩は一方において分業と，機械と，組織とを発達させ物質的生産を著しく拡大させた。この結果，人間は物質的に他者に依存する必要性から解放され，他者から独立するようになった。このように，人間がたがいに他者から自己を解放する過程をへて，社会に大衆化と呼ばれる「現事」が出現するようになった。

技術進歩は他方において道路と，交通と，通信とを発達させ世界の時間的距離を短縮させた。この結果，資源も，製品も，技術も，資本も，情報も，人間も国境を超えて交流するようになった。ここから国際化と呼ばれる「現事」が出現することになった。

大衆化と国際化とが「科学及び技術時代」の二大特徴であるとすれば，現代はこの二つの特徴につよく拘束されていることになる。大衆化と国際化とは，現代の「情況」をどのように変化させたといえようか。さしあたり，ヤスパースのいう，何を得るかを決める社会的情況にとっては，人間を豊かにしたという点で一応プラスの結果をもたらしたといえるであろう。更に，何を知るかを決める知識的情況についても，学問と教育の発達は，この情況を改善したこ

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

とも疑いない。しかし，何を信ずるかを決める宗教的情況についてのみ，大衆化と国際化とは決して望ましい結果をもたらしたとはいえない。何故なら，大衆化は，人間と人間との間から身分という境界をとりのぞき，国際化は国家と国家との間から国境という境界をとりのぞき，一見，人間と人間，国家と国家とを急速に近づけることに成功しているかに思えるが，実は，現代ほど人間と人間とが近づいているようでありながら遠ざかり，国家と国家も近づいているようでありながら遠ざかっている時代もなかったのではないだろうか。どうして，このような事態が起こったのだろうか。その理由は，意外に簡単であって，人間と人間，国家と国家がたがいに接近しやすくなったことは，同時に誤解を生ずる機会をも多発させることになったからである。たがいに他を知ることなく，人間同志，国家同志が真に融け合うことは難しい。かえって，おたがいに他について無知であったことを暴露し合って，信頼を失い合う悲劇が起こりやすい。

私は，現代の精神的情況を問題にする時，結局これが最も重大な問題であると思う。何を信ずるかをめぐる信頼の問題，これを決定する人と人との間でいえば道徳的情況，人と神との間でいえば宗教的状況が問題なのである。

私は，この問題の解決について社会的次元では，戦後西ドイツに興った新自由主義経済の学者がいっている「枠の政策」[29]（Rahmenpolitik）が有効であると思う。それは，人間と人間との接触や交流が無条件の下で行われるのでなく，一定の条件の下で行われるようにすることである。両者が無理なく受け入れられる条件，あるいは秩序を共通の土俵として，この枠の中で接触や交流が行われるようにすることである。国家と国家との接触や交流についても原理は同じである。重要なことは，いかなる枠をつくるかということである。更に重要なことは，一旦受け入れたならその枠はたがいに尊重されるべきことである。

この問題についての人間的次元からの解決は，ヤスパースによれば，「現実存在」としてその時々の「情況」に生きるわれわれが，その時々の「情況」に真剣に対決することによって人間としての「人間存在」を深くとりもどすことによって果たされる。大衆化は，多くの人間から「人間存在」を奪いとり，「人間存在」から遊離した根なし草の存在に人間を変えてしまった。われわれは，「人間存在」を回復して，「人間存在」（Menschsein）に基礎をおく「現実存在」（Dasein）として，実存的 existentiell に生きるべきである。私は，ヤスパースの以下の言葉が，ヤスパースのこのような根本主張をよく表していると思う。

「自己存在的精神の貴族は，世界に散らばっている。このような貴族の仲間に入る者は，勝手な判断によってそうなるのでなく，自己自らの存在の実現によってそうなるのである。散らばっている者が一つにされるのは，丁度「神秘な集団」（corpus mysticum）である見えざる教会がそうであるように，友人達の無名の鎖の中にある。この鎖のあちら，こちらでは，友人の誰かが自己の行為を客観化することによって，他の友人に，多分遠く離れた自己存在に，自己の存在を知らせるのである。この形なき精神の王国においては，接近し合い，たがいの交流（Kommunikation）の厳しさにより啓発し合う個々人のめぐり会いが，その時々に生ずる。このような個々人が，今日の世界で可能な最高の高揚の源泉となる。このような人々だけが，本当の意味での人間を形成する。」[30]

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

註

(1) Friedrich Ottlilienfeld—Gottl : Wirtschaft und Wissenschaft, 1931, S. 95.

(2) a.a.O.S.96.

(3) Joseph A. Schumpeter : History of Economic Analysis, 4th. ed, P.21.シュムペーターは，経済学研究の領域を，(1)歴史，(2)統計，(3)理論，(4)制度の四つに分け，(1)から(3)を対象とする研究領域を，「経済分析」(economic analysis) あるいは，「科学的経済学」(scientific economics) と名づけ，(4)を研究対象とする研究領域を，「経済社会学」(Economic Sociology) と名づけている。私は，「経済分析」，「科学的経済学」では，日本語として分かりにくいので，私の論旨に則して，「純粋経済学」と名づけることにした。

(4) Walter Eucken : Die Grundlagen der Nationalokonomie, 8 Aufl. 1965, S. 69.

(5) a.a.O.S.167.

(6) a.a.O.S.156.

(7) 鉢野正樹「自由主義，社会主義，国家主義」(北陸大学紀要第8号88頁)。

(8) Friedrich Ottlilienfeld—Gottl : Die Grenzen der Geschichte, in : Wirtschaft als Leben, 1925, S. 344.

(9) a.a.O.S.372.

(10) 鉢野正樹「認識論と存在論をめぐる一考察」(経済社会学会年報7　89頁)。

(11) a.a.O.S.360.

(12) a.a.O.S.363.

(13) a.a.O.S.356.

(14) a.a.O.S.686.

(15) a.a.O.S.686.

(16) Friedrich Ottlilienfeld—Gottl : Die Grenzen der Geschichte, S. 372.

(17) オットー・ブルンナー著　石井紫郎他訳，「ヨーロッパ——その歴史と精神」(昭和49年　岩波書店) 37頁。

(18) a.a.O.S.360.

(19) Karl Jaspers : Vom Ursprung und Ziel der Geschichte, 1949.カール・ヤスパース著　重田英世訳「歴史の起源と目標」(昭和39年　理想社) 15頁。

(20) 前掲書　15頁。

(21) Karl Jaspers : Die geistige Situation der Gegenwart, 8 Aufl. 1979, S. 24—S. 25.カール・ヤスパース著　飯島宗享訳　「現代の精神的状況」(昭和46年　理想社) 37頁。この箇所の訳は，私訳による。

(22) a.a.O.S.25—S.26.前掲書　37頁。

(23) a.a.O.S.26—S.27.前掲書　37頁。

(24) a.a.O.S.23—S.24.前掲書　37頁。この箇所の訳は，私訳による。

(25) カール・ヤスパース著　重田英世訳　「歴史の起源と目標」59頁。

(26) Karl Jaspers : Die geistige Situation der Gegenwart, S.17—S.18 ・カール・ヤスパース著　飯島宗享訳「現代の精神的状況」28頁。　この箇所の訳は，私訳による。

(27) a.a.O.S.18.前掲書　28頁。

(28) a.a.O.S.18.前掲書　28頁。

(29) ウイルヘルム・レプケ著　喜多村浩訳「ヒューマニズムの経済学」(昭和27年　勁草書房) 56頁。
Walter Euchen : Unser Zeitalter der Misserfolge, 1951, S. 43.

(30) a.a.O.S.179.前掲書　269頁。この箇所の訳は，私訳による。

NII-Electronic Library Service